



TITLE:

花山だより

AUTHOR(S):

CITATION:

花山だより. 天界 1937, 17(192): 237-237

ISSUE DATE:

1937-03-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167441>

RIGHT:

花 山 だ よ り

◇2月11日及び3月9日には協會の役員會を京都の新島會館、樂友會館に開催。會務執行規定、諸事業遂行への具體的方策等を討議した。21日には近く生れる生駒山の天文博物館に關する評議員會を大阪に招集して多數の御意見を伺つた由。3月6日は天文臺の第9回研究會修了後觀測部の方針、豫算問題、刊行物に對する意見等を交換した。

◇續々と彗星發見の電報が到着するが、最近の小澤彗星は正體不明の儘逸し去つた事は誠に残念である。花山の寫眞、眼視搜索も全く徒勞に終つた。

◇或日花山の圖書室で木邊氏の9耗が映寫されたが、之は過日臺員の愛宕スキ1行の紀念で、一行は稻葉、柴田、小山、堀井、高倉、木邊の諸氏と會員安東嬢で、木邊氏の妙技は全く素晴しく、小山、高倉氏も舊式ながら相當なもの、柴田氏のアヤシイ全制動、堀井氏の雪達摩が頭を搔く珍景等抱腹絶倒の舞臺が續出、就中安東嬢のクリスチヤニヤは見事であるが、兩手で顔を隠す事丈けは止めて頂き度い。稻葉氏の活躍振りは相憎出て來ないが、一人で奮闘せられた由、靴を毀した稻葉氏と眼鏡を飛ばした柴田氏には誠に御氣の毒であるが、2、3日は背の延びなかつた人もあるらしい。

◇柴田氏は映畫撮影術習得の爲め上京された。高城氏は毎日シンクロノーム時計の御守りに玉の汗、荒木氏は終日太陽館に閉ち籠つて滅多に御顔を見せない。山本教授は日食觀測の準備に全く寧日無しの有様で、臺員一同も出發を目前に控へて忙しい。

◇數日前から花山一帶の松の小枝に合掌して拜む森の愛護者一少年の木札が見える。一面に紙屑を撒き散らした心無き行樂者もあれば、彼方此方の大樹に小鳥の巢を設らへた床しい心の持主も見受ける。何れも世俗の反映ではあらうが、餘りにも懸絶した對稱ではある。

◇今度教室の荒木博士が恒星社より「天文と宇宙」と題する新著を公にされたが、廣く東西の天文學に思素的メスを振ひ、更に現代の宇宙構造論迄に及び、全巻を通じて全く博士獨特の面影が躍如としてゐる。萬人必讀の好著として、敢へて江湖に推奨する次第である。(3月18日 老人星記)